

## 承前

竹田翔平は、駐車場ビルの入り口から、おそるおそる顔を出した。

誰もいない。街路は、ゴミが散乱してはいるものの、ひっそりしていた。ほんの二十分ほど前には、ひどい混乱——というより、ほとんど暴動のような状態だったのだが。

翔平は、後ろを振り返ると、梨奈たちに向かって手招きする。

「おいで！ 今のうちに逃げよう」

十一歳の梨奈は、怯えた顔でかぶりを振る。

「だいじょうぶだ。誰もいないよ。さあ、早く！」

翔平は、気が焦って、つい怒鳴りつけるような口調になってしまう。

「お父さん、ゾンビ、いる？」

八歳の拓海が訊ねると、梨奈は、さらに怖そうな表情になって後ずさった。

「ゾンビなんか、いない。さっきのは、みんな、ふつうの人間だよ」

「嘘。ふつうなんかじゃない！」

梨奈が、叫んだ。

「あいつら、平気で人を襲って殺してたじゃない？ あたし、見たもん！」

「……おかしくなってるのは、事実だよ。でも、ゾンビじゃない。生身の人間だ」

翔平は、辛抱強く言い聞かせようとする。

「さあ、いまのうちに逃げないと」

「どこへ？」

「家に帰るんだ」

「無理だよ。調布ちゆうふまでは遠いし、電車もバスも動いてないでしょう？」

そう言いながらも、梨奈と拓海は、翔平の方へやって来た。

「どこかで、車を手に入れよう。……運がよければ、警察か自衛隊に保護してもらえるかもしれない」

ここに駐車していたワゴン車は、半グレのような二人組に奪われてしまった。もともと、その後、車は暴徒に襲われて炎上しているのが見えたから、かえってよかったのかもしれない。昔の映画などだと、配線を直結させて、簡単に車のエンジンをかけているが、今の車ではそれも難しかった。

翔平は、また街路の方を窺うかがい、耳を澄ませた。遠くで、銃声のような音が響いている。風に乗って、悲鳴のような声も。だが、この近辺はゴーストタウンのように静まりかえっていた。

「運が悪かったら？」

拓海が不信の表情で訊ねる。こういう物言いをする年頃だとわかってはいたが、危急の場合、イラッとする。

「運が悪ければ、警察や自衛隊には出会えない。そのときは、自力で安全なところへ行くしかないんだ」

「ねえ、もうちょっと、ここで隠れていようよ」

梨奈が、心細そうに言った。

「だってさ、途中でもしゾンビに遭ったら……」

「いいか。ここにいたって、安全じゃないんだ」

翔平は、しゃがんで子供より低い目線で語りかける。怖がらせるようなことは言いたくなかったが、この際、現状を納得させなくてはならなかった。

「あいつらは、またやって来るかもしれない。このビルはただの駐車場だから、上に追い詰められたら、もう逃げ場がないんだ」

「でも、道でゾンビに遭ったら、それで終わりじゃない？ あいつらの方が足は速いし、何も武器はないし……」

「気をつけて、出くわさないようにしよう。あいつらは、必ず音を立てるから、こっちが先に気がつくはずだ。音が聞こえたら、反対方向に逃げればいい」

「そっちも、ゾンビがいたら？」

拓海は、姉に加勢する。

「で、横に逃げたら、そっちもゾンビがいたら？ まわり中、全部ゾンビだったら？」

翔平は、溜め息をついた。本当に怖いのは、狂った群衆ではなく、悪鬼あくきのように人を殺しまくっている狂った超能力者なのだ。だが、そんなことを言ったら、よけいに怖がって、ここから出ようとしなくなるだろう。

「そうなる確率は低い。……いいか。今は、まわりが火事になってるようなものなんだ。逃げたって、運が悪ければ、火に巻かれるかもしれない。でも、逃げなきゃ、焼け死んでしまう。だから

ら、今すぐ逃げよう」

比喩として火事のイメージにすり替えることで、子供たちも、少しだけ落ちついたようだった。三人は、駐車場ビルから外に出た。

「……お父さん」

梨奈が喋りかけようとしたので、人差し指を唇に当て、静かにしろという身振りをした。

翔平を先頭に、拓海、梨奈の順で一列になって歩く。さっきから、心臓がバクバクしていた。こめかみの血管まで拍動しているようだ。

神様。どうか、やつらに遭わせないでください。もちろん、悪鬼にも……。

そういえば、さっきの二人組は、車を奪って逃げる前に、ゾンビのような群衆は悪鬼が作り出したとか言っていた。携帯電話の電波は死んでいるようなので確認しようがないが、ネットでは、そういう説が飛び交っているらしい。

もしそれが正しければ、ゾンビたちが跳ちやうりよう梁している場所には、悪鬼はいないことになる。

だからといって、ゾンビ——子供たちの言い方が移ってしまった——の中を縫っていくわけにもいかないが。

ハエの羽音がうるさく聞こえてきた。道の前方を見て、はっとする。数体の遺体が放置されており、早くもハエがどこからともなく集まってきているのだ。

翔平は、拓海と梨奈に合図して、道の反対側に移った。なるべく死体を見ないようにしながら、先を急ぐ。

おや。車がある。

かなり年季の入った白い軽自動車が道端に放置されていた。見たところ無傷のようだが、まさかキーが付けっぱなしということはないだろう。

運転席を覗き込み、ドキリとした。キーレスではない。昔懐かしいキーが刺さっている。燃料もあるようだ。ここへ来て、幸運に恵まれた。これに乗って幹線道路に出られれば、一気に都心の危険地帯を抜けられるかもしれない。

だが、樂觀は禁物だ。バッテリー切れかもしれない。そうでなければ、こんなところに放置されているはずがないではないか。翔平は運転席のドアを開けて、キーを回してみる。セルモーターが唸った。よし、後はエンジンさえかかれば……！

翔平は、運転席に座り、キーを回し続けた。セルモーターは快調な音を聴かせるのだが、肝心のエンジンが動かなかった。どうした。頼む、かかってくれ。

車には詳しくないが、スパークプラグか、ベルトに問題があるのかもしれないと思う。だとしても、ボンネットを開けたところで修理のしようがないが。

「……お父さん」

息を詰めて翔平がキーを回すのを見守っていた梨奈が、小さな声で呼びかける。

「もうちょっと待ってくれ。何だか、動きそうな気がするんだ」

「でも、お父さん」

梨奈は、翔平の肩に手をかけて揺すった。見ると、泣きそうな顔をしている。

「何だ？ ちょっと待ってくれ。今忙しいのは、わかるだろう？」

「お父さん。……あっち」

今度は、拓海が、震える囁き声で言った。後ろの方向を指差している。

翔平は、バックミラーで後ろを見た。それから、ぱっと振り返る。

道の遥か向こうにだが、人影が見える。じつと佇んで、こちらを見ているようだ。

まずい……。

翔平は、さらにキーを回した。今エンジンがかかりさえすれば、このまま逃げられる。

人影は、ゆっくりと、こちらに向かって近づいてくるようだ。

あれは、ふつうの人間だろうか。それとも、ゾンビなのか。

もしも後者なら、今さら走って逃げようとしても、追いつかれてしまうだろう。

三人とも助かるためには、エンジンをかけるしかなくなっていた。翔平は、祈るような思いでキーを回し続けたが、いつこうにエンジンは始動してくれない。

だめだ……絶望に背骨がグズグズに崩れていくような感覚。考えてみれば、あたりまえだった。エンジンがかかるのなら、誰も放置はしないだろう。

俺は、三人の運命を、勝ち目のない賭けに委ねてしまった。

自分だけならまだしも、梨奈と拓海の命まで。

バックミラーを見る。さっきの人影は、こちらに向かって走ってくる。さらに、その後ろからも、数人の人影が追いかけてきていた。

「車に乗りなさい！」

翔平は、とっさに、拓海と梨奈を後部座席に乗らせた。ドアを閉め、ロックをかける。

そんなことをしても、何の役にも立たないのに……。

はあ、はあ、はあ……。翔平は、喘ぎながら、ただキーを回し続ける。

それはもはや、死を待つまでの儀式にすぎなかった。

バックミラーに映った人影は、すでに、遠目にもゾンビだとわかるようになっていた。外見がそれほど変わっているわけではないが、表情や態度が違う。目を見開き、口からは涎を垂らし、唸りながら殺到してくるのだ。

そのとき、翔平の目に、別の人間の姿が映った。車の前方、二十メートルほどの場所だ。

一瞬、前からもゾンビが来たのかと思ったが、すぐに違うとわかる。

それは、二人の少女だった。

年齢は、梨奈と同じくらいだろうか。それぞれ白と黒の、ゴスロリ風のドレスに身を包んでいる。どこか沈鬱な顔でこちらを見ている二人の顔は、そっくりだった。どうやら、双子らしい。

「逃げろ！」

翔平は、大声で叫んだ。この子たちまで巻き添えにしたいとは思わなかった。

二人の少女も、今さら逃げ出したところで、ゾンビたちから逃げ切れるとは思えないが、それでも、警告はしてやるべきだろう。

二人の少女は、逃げなかった。顔を見合わせると、真っ直ぐに近づいてくる。

「何やってるんだ？ あいつらが、来るぞ！」

奇妙なことに、他人に警告をしてやっている間は、自分たちの身に迫った恐怖を少しは忘れられた。

「走れ！ どこか、ビルの中に隠れるんだ！」

翔平は、手を振って、少女たちを逃がそうとした。

「お父さん！」

後ろを見ていた梨奈が、大声で叫んだ。ゾンビたちは、もう、顔が見分けられるくらい近くまで迫ってきていた。

すると、空から黒い物体が急降下してきた。

それは、先頭のゾンビを直撃し、地面に打ち倒す。さらに、次々と黒い物体が、後から後から落ちてくる。

カラスだ……。

翔平は、息を呑んだ。

それは、とても現実の光景とは思えなかった。都心に棲すんでいるらしい無数のカラスがいつせいに舞い降りて、ゾンビたちを襲っているのだ。

後から走ってきたゾンビたちも、苦悶の表情で立ち止まり、手を振り回している。

何だ、いったい何が起きているんだ？

それから、はっとして、前を見た。

二人の少女のうち、黒い服を着ている方が、両手を前に出し、踊っているような優雅な動きを見せている。

この子は、超能力者なんだ……。

その考えは、天啓のように翔平に降りてきた。

鳥を操れる超能力者なんて聞いたこともなかったが、間違いなく、この子がやっている。



たぶん、俺たちを助けてくれているんだ。

翔平は、軽自動車から降りて、少女たちの方へ歩み寄った。後から梨奈と拓海も続く。

「き、君たち……あの！」

何と言っているかわからず、翔平は、その場に立って、深々と頭を下げた。

黒い服を来た少女は、翔平は無視して、梨奈に向かって話しかける。

「ねえ、こんなとこで何してるの？」

「あたしたち、家に帰る途中で、車を盗られちゃって」

梨奈も、二人が救い主だと理解しているらしく、両手を胸の前で握り合わせて訴える。

「お願いします。助けてください！ ゾンビたちに追われてるんです！」

「もう、だいじょうぶよ」

後ろにいた白い服の少女が答えた。

「わたしは美亜<sup>みあ</sup>、この子は亜美<sup>あみ</sup>。双子なの。あんなやつら、全部鳥のミサイルでやつつけちゃうから、楽勝だわ」

「……そうでもないかもね」

黒い服の少女が、眉間にシワを寄せて言う。

「どうして？ あの程度なら、亜美一人で処理できるでしょう？」

「カラスが足りないみたい」

見ると、ゾンビたちは、後から後からやって来る。一人を斃<sup>たお</sup>すのに数羽のカラスを使っているから、たしかに、このままだと、早晚、カラスが足りなくなってしまうだろう。

「困ったわね。この近くには、カモメはいないみたいだし。……いくら何でも、ハトとかスズメじゃね」

美亜は、おかしそうに笑う。困ったと言いながら、危機感はずつとたかまわなかった。

「鳥じゃないと、ダメなの？」

拓海が訊ねる。

「鳥が一番慣れてるっただけで、どうしても鳥じゃなきゃってことはないけど」

美亜は、首を傾げて拓海に答える。

「わたしたち、無生物を動かすのは苦手なの。基本的に、生き物しか使えないから」

翔平は、ぞっとした。

まさかとは思うが、カラスが尽きてしまったら、俺たち三人に特攻させる気じゃないだろうな。

目の前で次々に仲間を打ち倒されているのだから、ゾンビが怯んでくれればと願ったが、彼らからは恐怖という感情は欠落しているようだった。仲間の死骸を平気で乗り越えて、後から後から押し寄せてくる。

亜美も、ここへ来て、ようやく方針を変えて、カラスを節約することにしたらしかった。贅沢にゾンビにぶつけてしまうのではなく、なるべくカラスは温存しながら、クチバシでゾンビの目を抉り、視力を奪っていく。

しかし、そのやり方では、前ほどはゾンビの進軍速度を遅らせることはできなかった。眼球を失いながらも、やつらは闇雲に前に進んでくるし、逆にカラスを捕まえて喰い殺すやつもいた。

「……しようがないわね」

美亜は、溜め息をつく。

「キモイから、できれば、こんなやり方はしたくなかったけど」

どうするつもりだ。翔平は、身を強張こわばらせた。……俺はいい。子供たちだけは、勘弁してやってくれ。

美亜は、両手を目の前にかざして、大きく深呼吸した。

(つづく)